

心 (日本短波放送)

19

ニクソンを迎える中国の政情

間近にせまったニクソンの訪中と中国
内に起こりつつある政変について語る

ニクソン訪中と中国の内情

伊藤 北京とワシントンで同時に発表
になりましたが、二月二十一日にニクソ
ン大統領の北京訪問が、いよいよ実現す
ることになったわけです。これは少しわ
れわれが予想していたよりも早いよう
な気がしますね。三月とか四月とかい
う説もありましたが、これはアメリカは
大統領選挙で少し忙しいこともあつた
でしょう。

中嶋 一般的には、五月以降は大統領
選挙の前しよう戦になるわけですから、
それまでに、ということでも少し早目
にしかつたんじゃないかと思えます。

伊藤 中国側のほうですが、例の國慶
節のバレードが中止になったり、昨年九
月の中ごろに、重要会議が開かれたり、
最近では林彪副主席が政治的に失脚を
したんじゃないかという説が定着したよ
うな感じですが、そういう政変があつて北
京のほうを受け入れ体制ができずもう少

し延ばしてもらいたい意向を漏らしてい
る説もあつたんです。北京のほうもこ
ういう政変は一応かたはついたと見て
もいっていいでしょうか。

中嶋 問題は今回の政変がニクソン訪
中という中国にとつての大きな変化、
転換と切り離せないと思うんです。そ
の点では、この問題はそう簡単に全部
解決されるものではなくて、かなり根
が残っているだろうと思うんです。し
かし、当面は、米中会談は、まさに世
界の注目の中心で行なわれるわけだ
から、そういう状況を十分に考慮した上
で、周恩来の強力なリーダーシップ
によって、一応の事態は收拾してい
るんだというふうに見るんです。

伊藤 毛沢東じゃなくて、周恩来の
リーダーシップですか。
中嶋 米中接近にいちばん大きな役
を果したのは、なんといっても周恩来
が毛沢東の同意を取り付けるような形
でいろいろ舞台回しをしていることだ
と思

います。特にキッシンジャーとの会談
によって、今後予想される米中双方
のテーマであるとか、日取りである
とか、そのへんのところを含めて周
恩来が大きな力を発揮したと見る
んです。

伊藤 この米中接近は周恩来のイニ
シアティブのもとに進められたわけ
ですね。
中嶋 これは毛沢東の同意も取り付
けたと思いますが、どうもこの一年
の中国外交の大きな変化を見ていま
すと、その集約点として今回の米中
会談があるわけで、周恩来の力は無
視できない。ただ、それが今すぐ毛
沢東棚上げにはつながらないと思
います。とにかく、周恩来はクロ
ーズアップされていると見るん
です。

伊藤 これは非常に重要な問題で
すが、いずれにしても、政変のポ
イントは林彪およびその直系の人
たちがやられたことなんだろう
ね。その理由は、米中接近政策を
めぐっての対立

● 中嶋 嶺 雄
(東京外国語大助教授)

● 伊藤 喜久蔵
(東京新聞中国問題調査会)

でしようか。

中嶋 九月中旬からの一連の異変、
國慶節のバレードが中止されたり、
恒例の共同社説が出なかつたとか、
それから九月中旬以降中央政治
局の主要なメンバーが何人か姿
を消している問題、これに加
えてモンゴル奥地で飛行機が
落ちたとか、さまざまミステ
リーがございますね。これだけ
を切り離してみると、確かに
重大な突発事故なんです。九
全大会以降の中国の政治過程、
政治の大きな変化を見ますと、
わずかに、二年のうちに、九
全大会路線が大きく修正され、
米中接近という動きが出てきた
わけですね。

あれだけ激しかった文化大
革命、党内の実権派を打倒し、
毛沢東思想で純潔化された
新しい党をつくり、しかもその
党は、徹底して反帝反修精神に
乗らなければいけないとい
われた文化大革命の成果、
それが集約された形で九全
大会路線が大きく変化して
きている。その変化

の上に乗った今回の事態なので、これはかなり根が深い。そのことは、林彪を中心とするリーダーシップの重要な部分だ、どうも最近中国の中で潮流に乗らなくなってきたという気がするんです。

伊藤 九全大会路線の変更はなぜ起こってきたのでしょうか。林彪失脚にもつながら問題なんです、最近いわれておりますように、軍の力があまりにも強くなったことに対して党がイニシアティブをとらなければならぬという毛沢東の考えを通すため、九全大会路線を変更するようにしたのか、あるいはソ連の脅威があった、それに備えるために米中接近が具体的に必要になって、その過程において論争があったのか。こういう点が問題になると思っています。これは陳伯達の失脚とか、あるいは今度の林彪の失脚説などもそれぞれからむ問題ですが、米中接近をめぐる、周恩来と林彪、すなわち行政幹部系と軍との対立があったんではなくって、軍を押えるための政策として米中政策がでてきた。これは常識的にいわれていることと違うのですから、まちがっているかも知れませんが、今度の政変のいちばんのポイントは、毛沢東が林彪および林彪系の首脳たちの力の増大に対して非常な猜疑心を起こしたことが原因ではないか。

ちょうど昔、劉少奇が党の実権をほとんど握った状況に対して、毛沢東は二人の主権が中国にあるような状況ができたために一度後継者とした劉少奇を文化革命で打倒してしまつた。今度も林彪を後継者としておきながら、その林彪系の軍の力が党中央および地方党委委員会の書記とか副書記なんかの六〇%を占めてしまひ、軍人優先、あるいは軍事独裁体制ができたことによつて毛沢東は心配し、林彪の力をなんとかして押える必要があつた。ちょうどそういうところに、文化革命收拾という段階で行政幹部を使わなくてはならない必要ができた。

この結果周恩来と仲のいい軍の力が関係してると思っています。それで林彪系の軍人の力がはち合わせする状況ができて毛沢東は昔、林彪の軍、あるいは周恩来の行政幹部を使って劉少奇を打倒したと同じように、今度は周恩来および非林彪系の軍の力を使って林彪を倒した。昔スターリンがやったと同じように、当面の敵を倒すために他の者を使い、それが倒れると次の敵を倒すというようなやり方をしたのではなからうか。

日ごろ北のソ連からの脅威が中国にあるものですから、これに対して軍は、中ソ関係をあまり極端に悪くすることに對して当然反対したと思つて、そうしてまた、ソ連の軍力は非常に強いものですから、軍事予算を増大し、軍の近代化が必要だということに常に主張したと思つて、軍の主張を貫いて、いますと、当然ソ連との関係も、毛沢東の意向とは違つてよくなる方向にいくようになつて、結局、ソ連との対決をあくまでやるという毛沢東の考え方と対立したと思つて、

ですから毛沢東および周恩来は、外にはソ連の攻撃を牽制すること、国内においては林彪系の軍を押えるための牽制策として米中接近策を打ち出したのではなからうか。それで、当然林彪と周という形ではち合せし、毛が周を応援してこれを倒した図式があつたんだと思つて、

強くなりすぎた林彪の勢力

中島 確かにおっしゃつたとおりのような結果が今、出始めていることは事実で、党中央を見ましても残っているのは、毛沢東、周恩来、それから姚文元、張春橋、葉劍英という古参の、周恩来と近い軍人ですね。従来九全大会以後の中国のリーダーシップは完全な軍事独裁で、文化大革命は中国全体を兵営国家にしてしまつたんですね。その兵営国家、兵営体制は、昨年の夏にできた党委員会を全部見てますとますます色濃くなつてきた。ここに大きな問題があつたわけですね。

九全大会の林彪の政治報告は、ある意味ではソ連に対しても徹底的に戦うという強い姿勢でございましたね。林彪グループと、黄永勝、あるいは黄永勝の背景としての地方軍区の指導者、許世友、陳錫聯という、中国の、南京、瀋陽、福建という重要な拠点を握っている、いわば地方の指導者も、このごろ出てきていませんで、どうも林彪というのは、やっぱり一方では陳伯達とも結び付いたわけ、そういう意味で林彪は軍であると同時にイデオログであり、文革左派であつたわけですね。

そうしますと、むしろ軍の中にも、かなりリアリスティックなグループと、そういう潮流があつたのではないかと、しかも、その連中は九全大会の林彪的な路線があつたかもしれない。それが今回の米中接近という大きな転換で、軍の中でいろいろなあつれきが起こり、それを直すために一挙に軍の権威を失墜させてしまつたというふうにも見られるような気がするんです。ですからそのへんのところは、まだ断定する材料はないんですが、ともかく林彪が、あるいは失脚ということになりますと、いったい文革とはなんであつたのかという根本問題で、中国の民衆はどこを信じたらいのか、論理もなんにもなくなつてしまふわけですね。

伊藤 結論はそういうところへいくと思つて、陳伯達の、いわゆる五・一六兵団の批判と、林彪批判というものは、やはり同じ理論派として同じ線上につながらるものなんではしょうか。

中嶋 少なくとも文革のときは林彪が文革イデオログの代表である陳伯達グループと完全に結びつたと思つて、

ね。ですから今度は林彪がだめだということになるには、何か重大な理由があるような気がしますが、それから逆に林彪のほうから考えますと、現在、毛沢東に特にたてつく理由はないと思うんですね。ですからそのへんのところの疑問が解けない。ただ林彪の地位が問題であるということ、つい最近の「紅旗」の第十二号にも、紅軍第四軍の中にも毛沢東の三〇年代かなんかのことを引用し、誤った思想があるという。林彪は紅軍第四軍の指導者であったわけですから、それから廬山会議を強調して、同じような重大な階級闘争の決戦場がこの九月ぐらいにあった、あるいはそれ以前にあったようなことをおわしています。

それと同時に、セクト主義、派閥主義に対するきびしい批判があるんですが、この「紅旗」を見てみますと林彪に対する批判がはつきり出ていることは疑いなし。しかしながらこの「紅旗」の論又そのものを見ますと、それぞれ論文のトーンが少しずつ違うような気がするんです。このいちばん最後の河南省の論文なんかは、むしろ党内にいる野心家、陰謀家をたたくんですが、これは同学、心の友とか、昔から知己、友人、それから学校が同じもの、自分の親しい仲間とか、旧部下、こういうものが派閥をつくっているというように、強い批判があります。これはおそらく現在の中国で自分の部下だけをたくさん集めて派閥を

つくったっていうのは、ある意味では周恩来が、たとえば国連の代表に見られるように、行政官僚、つまり行政面の自分の親しいグループをかなり集めていますし、それが文革の收拾段階で目立っています。それからまた、黄永勝なんか軍のいわば仲間をかなり台頭させておられますので、そういうものに対する批判とも見られるんですね。

そうしますと、中国の中で、事態は乗り切ったと思いますが、まだまだどうも問題がすつきりしていないような気がするんですね。そこへ出てきたのが共同社説で、この共同社説を見ますと、かなりまだまだ問題が複雑だという気がするんです。

米中接近がもたらす

中国の政変

伊藤 ニクソンの訪中も発表されたことにタイミングを合せて一段落したときを示すために出したんじゃないだろうかという見方は考えられませんね。これだけの重大な問題が、そんなに簡単に片づくものと思えないですね。

河南省の著述班の書いたのはきびしく、他の二つと、遼寧省と江蘇省の論文と、トーンが違うというお話ですが、これは同じような立場から書かれたのではないという人もあるわけですね。この各省の党の首脳の前を、これは周恩来系、毛沢東系、林彪系というように分け

方をする人はよくありますが、そういうようなことも参考にしながら、最近の各省の放送がどういう放送したかということとをメモしてみたら、その三つの論文が出ております。遼寧、江蘇、河南は林彪批判についていちばん活発にやっている省ですね。

そうしてこの遼寧はさきほど話が出ました陳錫聯が力を持っており、江蘇が許世友、これも同じですね。

それから河南省が劉建勛、この人はやっぱり四軍系統ですが、周恩来と葉劍英と非常に仲がいいという評判の方ですね。許世友も陳毅、周恩来と仲がいい。

そうしてこの陳錫聯と許世友は、許世友の行動するところに陳錫聯ありというふうにいわれておることと、この遼寧には、副書記で毛沢東のおいだという人がついておりますね。そういうふうなことから、どうも毛沢東、周恩来、特に周恩来と近い三つの將軍たちが、力を合せて林彪批判を盛んにやっているのではないだろうか。それに比べて、林彪系の軍人が牛耳っているという福建、湖南、湖北、山西、青海というふうなところの放送は論文にも出ておりませんし、放送が不活発なような印象を受けます。

それから各省の党委員会の親玉の顔を見ますと、とくに昨年五月、貴州省のあと、八月の中ごろまでにできました九つの省の委員会では、林彪系でもない、周恩来系でもない、どっちかといえれば色彩

世界の国々のくらしを身近に紹介する雑誌

月刊 **海外廿四** '72 2月 号 45

購読お申込みは一部
 一六カ月三〇〇円は切
 手分六〇〇円の手を
 手分六〇〇円の手を

○ソロモン海の住民たち………西丸 震哉
 ○大繁盛の防衛………海と長髪族
 ○質屋が運子………遠洋航海
 ○戦局の重点はカンボジアに移る………山下 正雄
 ○北アイルランドのニューズ………山
 ○パプアニューギニアの海軍………
 ○グラフソロモン海軍………
 ○これからどうなる………
 ○座談会 気質健三・三好修・上別府親志

東京都新宿区若松町102 あちらのくらし社 電話(202)8632

のあんまりはつきりせんような人たちがなっているんです。ですからこの林彪批判は、七〇年九月の二中全会以後表面は極左派批判あるいは修正主義批判という形で極左批判を実際上打ち出してきたけれども、実際上は林彪の軍に対する粛清運動が続けられていたんだというふうに見ますと、昨年五月ごろあたりで一応の勝負みたいなのがついて、そこで林彪系のもので出れなくなつて、あとは両派の間をみたいた人たちが五月から八月にどつと、つくった感じもあるわけですね。

そうしますと、二十九の一級行政区の党委員会はどのようにできませんでしたか、その中には毛・周系あり、林彪系あり、その形勢望風派ありというわけで、これ自体もまだまだかたがついていない。これは、今後いろいろな意味でしこりが残って問題が出てくると思うんです。

この各省の党の委員会の顔ぶれを見ましても今申したような状況で、これを今後どうするのか、林彪批判、軍の首脳の批判に伴って、こういう人たちの入れ替えもあるといたしますと、せっかくできた党中央および地方の党委員会も、またやり直しということになって、これはまた大きな問題だろうと思うんです。

中嶋 今おっしゃった中で、許世友とか、陳錫聯なんかもこのところ姿を見せないようですね。

伊藤 これは姿を見せていないことが失脚なのか、あるいはこの活発な運動その他をするために姿を見せないのかですね。許世友、陳錫聯が全く失脚したという説もまだないのではないのでしょうか。許世友は活発に林彪打倒に動いているように考えております。

中嶋 とにかく党中央を見ましても、二十名と常務委員を含めて二十五名も刃がこぼれるように欠けてきているわけですね。で、そういう中で米中接近という大きな転換が行なわれたわけですから、米中接近という中国にとっての大転換は

党中央の全体的な合意のもとではなかったようですね。党中央委員会とか、政治局会議を開いて合意するという状況にはなかったわけで、そこに今度の政変の大きなかぎがあるように思うんです。

伊藤 ニクソン大統領は中国のそういう実情を見て、ここで中国接近を打ち出せば中国国内がごたごたするであろうと思つて米中接近を打ち出したんでしょか。

中嶋 それは基本的には、ニクソン・キッシンジャーのグラランド・ストラテジーとしては、米中関係の緩和という問題ありましたが、ニクソンが次の大統領選挙にもう一回勝利して、次の大統領選挙に勝ったときにやるという課題であったわけですね。それが、テンポが早まったのは、アメリカ国内の事情もありました。が、今回の第二次キッシンジャー訪中なんか見ますと、この問題は全然触れなかったといいますが、アメリカ側は十分このことを見きわめて、中国へ乗り出していくんだというふうに見えますね。

伊藤 そうすると、最近の中国の政変は、アメリカとしては全く思うつぼにはまったということになるわけですね。

中嶋 だからそれに対するリアクションといえますか、それ見たことかというような反応が中国の中にもまだまだ出てくる余地があるでしょうかね。

伊藤 要するに、中国に対して門戸を開くと、中国を封じ込めるのではなく

て、中国に対して門戸を開いて、そうして自由陣営の空気を吹き込むことによつて、中国自体はもっと世界を知つて、そのために中国自体が柔らくなつてくる。それが世界平和のためにいいのではないかと、その説があつて、七〇年あたりもそういう説を盛んに唱えてたんです。

毛沢東が林彪をたたかなくてはならぬというふうなことで、アメリカのそれに飛びついたのか、その点はなんともいえないんです。アメリカとしましては、いずれにしても米中接近によつて中国がごたごたしてくれるということは、ある意味では望ましいことかもわからんですね。

中嶋 アメリカは明らかにそれをねらっていたわけですから、ニクソンも、中国のドアを開くということを決定の声明でいいましたし、さらにアメリカの側の自由化の外圧が今中国大陸に押し寄せているんで、それに中国がどう対応するかというのが今後の大きな課題だろうと思ひます。

(十二月六日放送)

V おしらせ

日本短波放送では、本誌のほか毎月「時の話題」「自由の窓」「世界経済ダイヤル・レポート」を発行しております。いずれも、日本短波放送で放送したものの収録です。国内の政治経済は勿論世界各国の情勢を、各方面の第一線の方々にお話しいただいております。どうぞ本誌とあわせてご愛読下さい。なお手続は左記のとおりです。

「時の話題」

一部三十円です。お申込は

東京都港区赤坂一丁目九番十五号

日本短波放送「時の話題」係

「自由の窓」

一年分として送料とも三〇〇円をそえ、お申込み下さい。

東京都港区赤坂一丁目九番十五号

日本短波放送「自由の窓」係

「世界経済ダイヤル・レポート」

本誌は無料ですが、郵便料が一部につき三五円となっておりますので、一年分四二〇円、半年分二一〇円となります。普通為替又は郵便切手を同封の上お申し込み下さい。

東京都港区赤坂一丁目九番十五号

日本短波放送

「世界経済ダイヤル・レポート」係